



**Simon & Garfunkel  
Web Forum  
Off-Line Meeting  
2012**

# MENU ■本日のメニュー

## ■ オープニング

## ■ 自己紹介タイム

## ■ S+G

Surfer Girl、Somethign So Right、Still Crazy After All These Years、  
とても変わった人、Kodachrome、Wednesday Morning, 3 A.M.

## ■ 東山

He Was My Brother、Peggy-O、Scarborough Fair

## ■BP&MEVA&KAZU

I Am A Rock、Slip Slidin' Away、Feelin' Groovy

## ■ こうもり&よしあき&松月&里香

Silent Eyes、Bright Eyes、Under The African Skies、Duncan

## ■ ひろみつ

Homeward Bound、Overs、Kathy's Song

## ■ けん

Mrs. Robinson、Anji~At The Zoo、The Boxer

## ■ イッシー&バツシー

Graceland、Hearts And Bones、Another Lullaby、  
Sound Of Silence ~ Sound Of Silence work shop

# るぅ&クリポン / こうもり夫婦 ジョイント・ライブ 2012

2012.9.7 (fri.) 曙橋・バックイントاون

19:30 start charge : ¥2,100-

60年代活躍したカナダのフォークデュオ Ian&Sylvia をカバーしている数少ないユニット るぅ&クリポンと、ジェームス・テイラー、キャロル・キングなどをカバーしているこうもり夫婦のジョイントライブ。それぞれのマニアックな曲から、PP&M、カーペンターズまでアコースティックなサウンドをお届けします。

※予約制となっておりますので、お店のサイト又はお電話でのご予約か、メンバーに直接ご連絡ください。

バックイントاون Back In Town

東京都新宿区住吉町3-2 第2山田ビルB1

TEL 03(3353)4655 (都営新宿線 曙橋 A2出口より徒歩2分)

Web サイト <http://homepage3.nifty.com/backintown/>



Lue & Kuripon <http://angel.ap.teacup.com/luekuri/>



こうもり夫婦



# 「伝説」に三言しか声をかけられなかった男 BlankPaper

西暦2012年7月18日水曜日夜、アムステルダム郊外、午後11時過ぎ。三時間のコンサートが終わり、ひよんなことから、Uさん、Nico（パリから来たファンのニコラスくん、Uさんとはお知り合い）と私は、Ziggo Domeの楽屋口でPSを待つことを許されていた。外は雨が降り続き、楽屋口の廊下は広く、ところどころでスタッフが片付けや談笑をしている。

何人ものミュージシャンがここを通過してツアーバスに戻って行く。何人かはUさんやNicoに気がついて、話したり握手したりしていく。私達をここに入れてくれたバキチ・クマロの他、ビンセント、トニー、アンディ・スニッツァー、ヒュー・マセケラまで。嬉しかったのは札幌で一緒に飲んだ、マーク・スチュワートが憶えていてくれたこと。

本当に来るのかな、と思っているうちに、エレベーターのドアが開き、PSがおつきの人と現れた。Uさんが挨拶をする。Uさんの後ろに控えている私にもPSが視線を送ってくれた。握手をする。

私：(Uさんと自分を指して) Friends. (この人と私は友達です。なので、ここまで一緒についてきました。)

PS: Very good. Nice. (記憶曖昧。「よく来たねえ。」多分そんな感じ。)

私：From Japan. (はるばる日本から来ました。とても良いコンサートでした。ありがとうございます。←言っていないが気持ち。)

Uさんが、お土産の阪神タイガースの帽子を渡す。昨年もPSに会っているUさんをPSは憶えていたようだ。Nicoが今後のツアーがあるのか、などを英語で話し始める。記憶が曖昧だが後で聞いたところ、アメリカで少しだけこの続きをやるかもしれないとのこと。自分で憶えているのはPSが今は自分のアルバムのために曲を書いている（たくさん書いている）と言っていたこと。この人はまだやるんだ、と感心する。(My own albumという言葉だけが記憶に強く印象づけられている。)

UさんとNicoは記念撮影モードに入っている。PSも快く応じている。特にUさんとは手をつないで恋人モードである。

私：(カメラ、というかiPhoneを見せながら) Can I... Can I? (私も写真を撮ってもらってもいいですか? 一生の記念なので。←言っていない。)

PS: Sure.

そして写真をUさんとNicoに撮ってもらう。PSはUさんと、例の西洋人がやるほおずりをして去って行った。

私：(ありがとうございます。日本にもできたら来てください。ファンが待っています。←全く言っていないが気持ち...。見送っているだけ。)

アムステルダム郊外の雨は降り続いていた。(涙...そして完。)

Special Thanks to Bakiti Kumalo, Uraume-san, Nicolas de Paris.





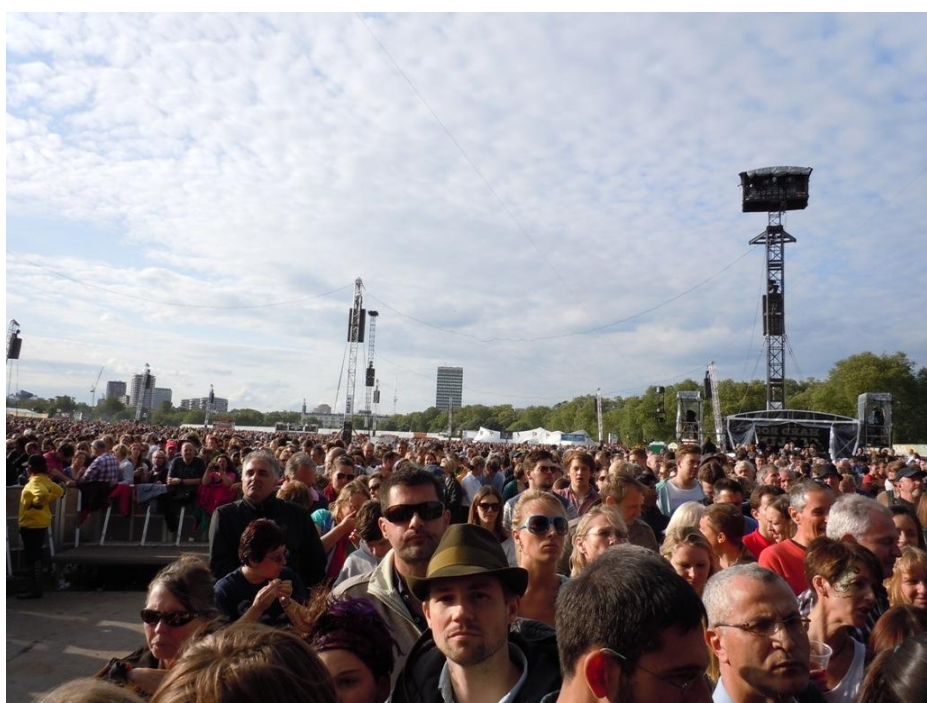
# グレイスランド25周年ツアー観覧記

うらうめ

## ◆ 7/15(日) HYDE PARK LONDON, UK

10日間ほど雨続きだったLondon。この日もかなり怪しい色の雲も見受けられたが何とか天気が保ってくれた。明けて翌日のLondonは、やはり雨。これまで野外コンサート降雨率0%、私ってぢつは晴れ女？ Pic. 1 Hyde Park で開場を待つ

開場は12:00のためChokuさんと10:00過ぎに待合せ、入場ゲートになるべく近いところまで行きたいのでタクシーを使う。10:30にはゲート前に立っていた。入口は向かって右端がVIPチケット入場口。それを除く40近くある柵で区切られた列から、どうも「各馬一斉にスタート」となる様な感じ。早く来た労力が余り報われない制度だ。



Hyde Park で開場を待つ人たち

開門時間が近づいても何やら手持ち無沙汰な人たちが沢山いる。漏れ聞こえてくる会話の内容は...「バーコードリーダーが足りない」もぎりのバイト人数＝ゲートの数分の端末が無く、追加取寄せ中らしい。Hard Rock Callingって、昨日も一昨日もやっているんだよね？大丈夫か、倫敦五輪!? というような何ともイギリスらしい場面に遭遇した。

遅れること15分くらい、やっと開門。メインステージは200m以上先だ。一応走ってみるが、ぬかるんでまではいないものかなり足下が悪く速度が出せない(何故?、笑) 場所取りは斥候に任せ、無理せず早足に切替える。やっとステージに辿り着くと流石斥候！ ほぼベストポジションに陣取ってくれている。

さて、これから開演まで2.0h、Paulの出番まで約7.5hの苦行が続く...かと思っただが、前座の人たちも案外楽しめた。やはりメインステージの出演者だけのことはある。時間割と感想は次のとおり。やればできるじゃん、というくらい正確に進行していく。前日のSpringsteen & Sir McCartneyを時間切れで強制マイクオフにしたことで主催者側が相当ナーバスになっているらしいのと、何より大トリを待たせるワケにはいかないですものね。

14:00 - 14:25	Karima Francis	○
14:45 - 15:15	Robert Randolph	○ー
15:40 - 16:10	Punch Brothers	○+
16:35 - 17:10	Christina Perri	○+
17:40 - 18:40	Alison Krauss & Union Station ft. Jerry Douglas	○
19:20 - 22:20	Paul Simon	◎∞

特に最後は、あー、Jerry Douglas絶対"The Boxer"で登場するよねえ～。などと思いながら観ていた。Alison Kraussが終了し、セット替え。Paulのエンジニアたちの腕の見せ処だ。ドラム2セット、パーカッション1セット+α、キーボード1セット+α、ピアノ1セット、ギター4人分+α、ベース1人分、ホーン3+α、ボーカルマイク23(たぶん).....オープニングから使うわけではないが、ボーカルマイクは全ての本数を一度定位置に並べてみて、サウンドチェックも行っている。前座の方々のシンプルなセットに比べると、マイクが全部並んだだけでも圧巻だ。本当に40分で組めるのか？

+αとあるのは、バンドメンバーの殆どがメイン楽器以外のいろいろな楽器を楽曲毎に受け持っているから 予定の開演時間があともう少しに迫りつつある中、Vincentの側のギターを担当している女性エンジニアが、何やら頭を抱えてテンパっている。配線が分からなくなった??? 音が出ていない???

結局10分弱遅れて、いよいよPaulの登場だ！

コンサートは3部構成になっている。最初はPaulソロ。これは昨年のEUツアーの短縮版といった感じ。オープニングが"Kodachrome"というのが新鮮だ。そして"Gone at Last"へ雪崩れ込む。続く"Dazzling Blue"では先ほど前座でパフォーマンスした Punch Brothersのフィドル、Gabe Witcherが参加。"50ways"まで立て続けに4曲終わった

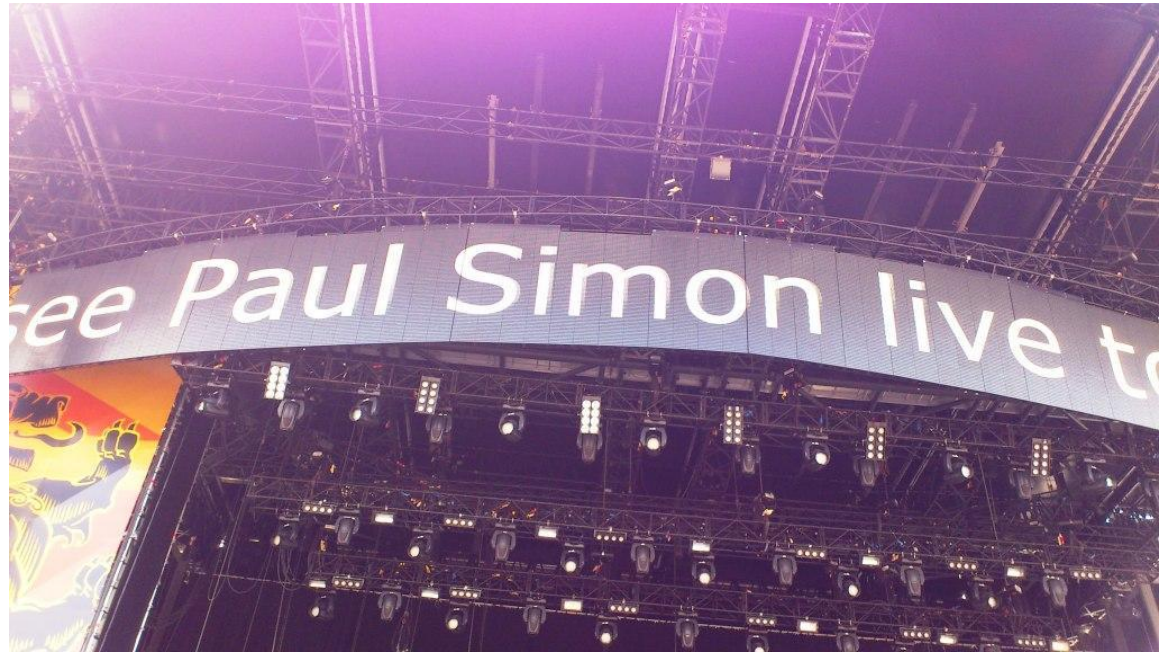


ところで、HYDE PARKスペシャルゲストとしてJimmy Cliff登場。ソロで"The Harder They Come", "Many Rivers To Cross"を披露し、Paulと一緒に"Vietnam"。"Mother And Child Reunion"では正に夢の共演。Pic. 2 ステージ上部の掲示板には、tweetが表示されていた

Paulソロに戻って、"Hearts And Bones"～"Mystery Train"～"Wheels"のメドレーは去年のセットリストと同じ流れ。ただJulio"の口笛は、今回はPaul担当でした。ちゃんと吹けてた。^^ "Slip Slidin' Away"は今年も観客全員合唱。この楽曲は根強い人気を持っている。第1部の最後は、"The Obvious Child"。昨年同様、Bakithiを初めとしたバックバンドの半分はパーカッション部隊に変身する。Paulバンドのメンバーは、複数楽器をこなせないダメ、とは昨年Bakithiが冗談半分・本気半分で言った言葉。

次にこのツアーの本編ともいえるGracelandセット。

PaulによってLadysmith Black Mambazoが紹介されるとものすごい歓声と拍手。ツアー各地で、この歓待ぶりは変わらなかった。改めてLBMの欧州での認知度・人気を思い知らされた。Paulは一旦引っ込んで、LBMのソロが2曲。"Hello My Baby"と"Nomathemba"だ。PaulとRoy Haleeがプロデュースした"Shaka Zulu"から。この選曲にもシビれた。そしてPaulが何も持たずに再びステージへ戻り、静かに"Homeless"が始まる。



ステージ上部の掲示板には、tweetが表示されていた

その後改めてLBMのリーダー Joseph Shabalalaが紹介され、Gracelandのレコーディングメンバーで本ツアーに参加したミュージシャンが一人ずつ呼び出される。John Selolwane、Ray Phiri、Isaac Mtshali、Barney Rachabane、そしてBakithi Kumalo、Tony Cedras。最後にHugh Masekela。バックコーラスにGaza Sistersが加わり、そこにMark、Jamy、Andyがサポートとして参加。

"Diamonds on the Soles of Her Shoes"が始まる。Paulとハイタッチするエンディングはお約束。そのまま舞台袖へと去っていき、LBMとのコラボが終了。

"I Know What I Know", "The Boy in the Bubble", "Crazy Love Vol II"と3曲続けて演奏。Gaza Sistersで聴く"I Know What I Know"が最高に楽しい!!

ここでGaza Sistersを紹介。そして改めてHugh Masekelaが紹介され、彼のソロで"Bring Him Back Home"と"Stimela"。DVDで観るだけだったZimbabwe公演を彷彿とさせる景色が目の前にあることに何ともいえない感慨を覚えた。これでMiriam Makebaがいればもう最高だが、もはやそれは叶わぬ夢となっている。その代役という重要な位置を任されたのが、Thandiswa Mazwaiだ。"Bring Him Back Home"と"Stimela"の間で、Hughから「妹分みたな子だ」と紹介されて、ソロで"African Sunset"を披露。おお、なるほど。非常にパンチのある声とアフリカンサウンド独特のリズムに合いの手のようなコールが加わる。期待が膨らむが、Paul、Sontiとのトリオで歌った"Under African Skies"では、なぜだか非常にナーバスになっていてソロのときの勢いが無い。これは、私の観た4回すべてに感じたこと。一緒に歌ったGaza Sistersのただ一人の当時のオリジナルメンバーSonti Mdebeleは非常に安定していて頼もしい限り。それに引替えThandiswaは見ようによってはおどおどしている感じ。Paulが最大限の気遣いでThandiswaをサポートしている。私としてはSontiとのツーショットを狙っていたのだが、Paulは99.9%、ThandiswaにつきっきりでSontiの方を向くことは殆ど無かった。

今年のツアーは4回ともすべての会場で、写真撮影を咎められることはなかった。特にHYDE PARKはプロ用でなければOKとチケットに明記してあった。

"Stimela"のあとは一転して陽気に"Gumboots"、ズールー語のイントロが加えられた"Under African Skies", "Graceland", "AI"と怒濤のメドレー。"Graceland"では'91CPのように、エンディングでギターをかき鳴らしながらステージの端から端まで、オーディエンスへご挨拶。"AI"の出だしも、VincentではなくRay!

"AI"で最高潮に盛り上がったところで、Gracelandセットが終了。メンバー全員が一旦ステージから退場する。encoreはPaulソロで"SOS"。去年のツアーはこの"SOS"が圧巻だったが、それに変わらぬパフォーマンスだった。

続く"The Boxer"で、やはりJerry Douglasが呼び出される。黄昏のHyde Parkに"Lie-la-lie"の合唱が響く。一息おいて、"Late In The Evening"。Paulは声の調子も全く落ちておらずとてもパワフルだ。最後の最後は"Still Crazy"。そのあとバンドメンバー全員がステージ上に呼び戻され、メンバー紹介と挨拶をして終了。Dublinのようにもう一度全員で"AI"をやってくれるかと期待したのだが、残念ながらそのご馳走はこのあとのコンサートでも再現されることはなかった。



それでも、約3h、もうお腹一杯のショーだった。

終演後は、タクシーを拾おうにもなかなか見つからず、人の流れに乗って歩くうちに1つ先の地下鉄駅Green Parkに着いてしまったので、そのまま乗車。何故1つ先かって？最寄り駅は混雑を恐れて閉鎖されていたからだ。Chokuくんによるとよくあることらしい。オリンピックでも同じことをするのだろうか？事情を知らない旅行者はホテルに帰れないゾ。もう1度云う、大丈夫か倫敦五輪！？

#### ◆ 7/16(月) HYDE PARK LONDON, UK EXTRAS

昨夜終演後、ChokuくんからBakithiから連絡が入ったため、08:45に彼らの宿泊ホテルロビーに集合。少し遅刻して9時近くに到着。すでにBakithi、Ray、Chokuくんが歓談中。LondonのAppleに勤務しているBakithiの合いのところへ一緒に向かう。車中Bakithiから西日本、とりわけ九州の水害についてお見舞いの言葉を頂戴する。旅先でもこうして日本のことを気にかけてくれていることに、感謝です。ヒロシたちは大丈夫か？という問いから今どうしている？という話に発展し、そのままこうもりさんへTEL。どうも睡眠中を起こしてしまったようですが、Bakithiはヒロシと話せて上機嫌でした。^^

アップルに着くと、さすがにオフィスの中まで同行はできないので、受付前の商談スペースで待つことに。

10:00少し前に戻ってきて、そのまま皆でストアの方へ。RayがiPhoneで使えるレコーディング用のパーツを購入。外装ケースは結構大きくて携帯用には見えないのだけれど、Appleの袋をナップザックのように背中に背負って「これでアイデアを簡単に録音できる」と、とても嬉しそう。

行きのタクシーは当然のこととしてこちらで負担したのだが、帰りはRayがさりげなく私たちが奥の席へ座らせ、一番支払易い席に自分が腰を下ろした。「Makeing of Greaceland」や'91CP「Under African skies」などで観るRayはとてつもない鋭い目をした、一見取っつきにくい怖そうなイメージがあったが、道中、ついつい日本式に三步下がって...の私に徹頭徹尾レディ・ファーストを貫いてくれたり、このタクシーの席次のことといい、本当に優しくきめ細やかな紳士でした。

帰りの車中では、3人で何やらぎたあな話をしておりましたが内容は私にはちんぷんかんぷんですっ！（きっぱり、いろいろな人に怒られる前に宣言しておきます 笑）

何かの拍子にMandelaさんの話になった。明後日(7/18)がMandelaさんのお誕生日だと。そしてRayとBakithi、2人が声を揃えていつまでも元気で生きていてほしいと。Bakithiが「最近は何病気でずっと入院しているけど、100歳までは何とか生きてほしいなあ」とするとRayが「100歳か.....、あと6年だな」としてしばし感慨深げに沈黙。

2人、いえ南アフリカの人たちにとってMandelaさんは本当に特別な存在なんだと、こちらの胸も熱くなった。

出発前の寸暇を惜しんでの交流だったが、何とか彼らを11:00の出発に充分間に合う時間でホテルに送り届けることができた。Bakithiは日本での反省(荷造りができておらず東京ドーム後のオフ会に参加できなかった)からか、今回は昨夜のうちにパッキングを完了し今朝はチェックアウトするだけにしてあるとのことだった。Bakithi少年も成長したらしい(笑)。



スクリーンから、貴重な3ショット

#### ◆ 7/17(火) VORST NATIONAAL Bruxelles, Belgium

コンサート前に会場であるVorst Nationaalの下見。案内どおりに鉄道で向かおうとしたが、その電車は1時間おきくらいにしか走っていないようだ。そこで帰り道に使おうと思っていたBruxelles MIDI駅まで鉄道→トラムのパターンで行くことに(こちらは頻繁に出ている)。トラムの駅からは徒歩で3~4分といったところ。周りは一見閑静な住宅街といった感じ。裏手へ回ると既にツアートラックが到着していた。

街に戻って次に向かったのは、マグリット美術館。ReneとGeorgetteの写真は沢山あったが、残念ながら犬を連れたものはなかった。

アヴィニオン演劇祭から回り道をして参戦するBPさんとBruxelles Central駅で合流し、BPさん宿泊のホ



テルマンお勧めであるバスで行くことにした。バスは10分に1本くらいと結構頻りに運行されており、約30分ほどで指示された停留所へ。会場横手にレストランが何件か入っているの、そこで軽く食事でもと考えていたが、すでに入場が始まっていたためスタンディングエリアのわたしは、そのまま会場内へ入ることに。スタンド席のBPさんにも食事抜きに付合せてしまい、申し訳ないことをした。

場内に入ると既に最前列はもうスキマもない状態。仕方なくTonyのさらに左側辺りの2列目に喰込む。セットリストはHyde Parkの特別ゲスト分がなくなっただけで、あとは同じ内容だった。

Paulの調子は衰えておらず、今日も好調。昨年のような喉のトラブルもなく元気でいてくれることがとても嬉しい。聞くところによると食べ物にも非常に気を使っているようだし、Paulも自身の健康を保つことに努力しているようだ。本当に敬意を払いたいと思う。

20:30開演で、今日も3h弱のステージ。終演後BPさんと再会したのは、もう23:00過ぎ。明日のアムスは移動即コンサートとなるので、荷造りもあるし素直に帰途につくことに。帰りは少しでも歩く距離を減らしたかったので ترام→列車を強く推奨し(笑)、Bruxelles Centralからホテルへと戻った。

#### ◆ 7/18(水) ZIGGO DOME Amsterdam, The Netherlands

BPさんと同じ列車(Thalys)でAmsterdamに向かうことが分かったので、MIDI駅から一緒に移動。定刻より20分以上遅れて14:00近くにアムステルダム中央駅へ到着。外は雨だが、傘を差さなくても耐えられるほど。ところが少し道に迷い結局部屋へ落ち着いたのは14:30。BPさんとは15:30に駅前で待合せ。道に迷ったせいで結構濡れてしまったのでシャワーも浴びたいし、あと1時間で支度できるのか？

結局15分遅れで待合せ場所に着いたが、BPさんがいない！待ちくたびれられてしまったかと思ったのだが、何と場所を間違えていたとのこと(似たような出入り口が何カ所もある)で、5分ほど待つて無事会うことが出来た。

会場のZiggo Domeまでは地下鉄を利用。

会場に着くと2Fレストランから下りてきた男性がこちらを見ながらニコニコと近づいてきて「僕のこと覚えてる？」と。「Nicolas!!!、もちろん！」2002年、初めてPaulのコンサートを観に行ったときにMontreuxはじめ各地でアテンドしてくれたNicoだった。Chokuくんから彼の近況聞いてはいたが、結婚して子供ができて、もう以前ほど沢山コンサートには行けなくなったけれど、まだまだ"still crazy"らしい。今回はお母さん、奥さん、お子さんと、家族全員でアムスに来ているとのこと。

ここZiggo Domeの入場もHyde Park同様、10個くらいのゲートから各馬一斉にスタートの様。開場時間が近づき、係員が各扉を開放し配置に付く。"On your mark, ready, GO!" ..... BPさんと私の並んでいる列だけめっちゃくちゃ進み方が遅いんですけど。。。もぎりのおねいさんがトロいのか器械の不調なのか？バーコードがうまく読みとれないのだ！そうしているうちにも周りの列はどんどん進んでいるし、あろうことか同じ列の後ろの人たちのチケットを先に読み始めたりしている！半分ケンカするような感じでやっと突破。しかし、BPさんが

カー一杯走ってくれたにもかかわらず、Mickのさらに右側かなり端の方になってしまった。

でも最前列が確保できて良かった。BPさんには事前に「どんなに端でも絶対最前列！」とお願いしていたのだ。なぜなら、視界・場所の保持し易さ・荷物が置ける etc.etc. いろいろな面で最前列は楽なのだ。特に柵があって身体を預けることができるのは、とっても重要。アクシデントもありましたが「最近走っていないからなあ。。。」というBPさんの頑張りに感謝です。Nicoは...と辺りを見回すと、流石、最前列の真ん真ん中にちゃん～んといました。

セットリストは前日のBruxellesと同じ。

今日はMandelaさんのお誕生日。ということで、Hughは渾身のパフォーマンス。私もそれに応えて"Bring Him Back Home Mandela"では、拳を目一杯上げてきた。^^

そして、生"Stimela"。最高です。Pic. 4 ♪ Call Me All!!

アンコールでの演奏中、Bakithiが私に気づき



♪ Call Me All!!



セットの隙間からこちらを窺っている。手を振るとにっこり笑って頷き返してくれた。クロージングのときもこちらに合図を送って、終演後にわざわざ私たちの近くまで来てステージ脇の方へ回れとのゼスチャー。幕内／外を分ける柵を挟んで、ハグハグしてきました。そしてどうも今回はこれが最後のチャンスかなと思い、Bakithiに、Paulに渡してほしいとお土産を差出すと「自分で直接渡しなさい。」と。Nicoに私と一緒に楽屋口の方へ廻れと言っている。

そこからが、大変！ Nicoは一目散に人混みを縫って出口へ向かい、それを懸命に追いかけるBPさんと私。駐車場のゲート目指し走る、走る、走る。こんなに走ったのは久しぶりだ。息も絶え絶えになっている私の荷物を途中からNicoが持ってくれます。雨もだんだん本降りになってくる中、傘も差さずひたすら走る。やっと辿り着いた駐車場のゲートは、しかし閉ざされていて中へ入ることはできそうにない。Nicoが反対側の様子を見に行ってくれる(元気だ)。そろそろ待ちくたびれた頃、中に入ることができたNicoが門の隙間から向こうに廻ってあっちから入ってきて！と。イヤ簡単に仰いますけど、雨は降るわ、歩道は縁石ほどの巾しかないわ、平均台の上を走るような感じで駐車場脇を縦断します。やっと反対側から中へ入るとBakithiとNicoが出迎えてくれた。「この格好で走ったのか！！！」と驚くBakithi。ええ、ええ、お陰で髪も化粧も着付けもこんなにボロボロなんですけど。やだなあ、こんな格好でPaulに会うのは。

楽屋口へと向かう途中、Adamに遭遇。どうやら私のことを覚えているような様子。「僕に用はないでしょう？」と云ってバスの方へ行きかけるのを止めて、「お土産を持ってきているから、Markと一緒に食べてね」と雲丹フレーバースナック2種&山葵フレーバースナック1種を渡す。Bakithi少年のやんちゃの、少しでも穴埋めができれば、お易いものです！

楽屋入口のドアの内側、エントランスで佇んでいると次々にメンバーが出てくる。Andyが皆をやり過ごしてケータイでメールチェックかな？。終わったのを確かめてから、日本に来る予定はないの？2年前にブルーノートに観に行ったよ。と声を掛けた。すると、残念ながら今のところ全くその予定はないとのこと。そして昨年3.11の津波被害がとてもショックで心を痛めていると、とても丁寧なお見舞いをいただき、却って恐縮してしまった。

それからしばらくしてMarkが出てきて、再会を喜び合ってハグ。Adamにお土産を渡してあるのであとで一緒に食べてと伝える。(ちょっとしどろもどろになってうまく伝わらなかったのも、BPさんが助けてくれました)再会を喜び合ったのも束の間「ゴメンね、もうバスに飛び乗らなくちゃいけないんだ」と先を急ぎます。うんうん、分かってる。これが真っ当な大人の姿だわ。(笑)

一通りメンバーやスタッフが行き過ぎてしばらく経った頃、また3人ほどやってきた。その一番後ろに隠れるような形でPaulが佇んでいたのです！おずおずと近づいていって、これプレゼントです、とタイガースの復刻版ピンストライプキャップと新製品のタオルをセットで渡す。「ああ！阪神タイガースだね！」ととても嬉しそうな笑顔。それに勇気づけられて「私のことを覚えていますか？」と図々しく訊いてみる。「もちろんだよ」え—————っ！！ここから先は15cmほど宙に浮いて頭が白くなってきてしまったので余り覚えていない。(笑)

Nicoが何か訊いているが、応えているPaulの声はもう心地よいBGMにしか感じられない。それでもいくつか聞き取れた言葉とBPさんの補足説明で、現在次回作のアルバムを制作中、曲を書いている最中。ということが分かった。Paulのことだからリリースはまだ当分先のことになるでしょうが、次はどんな作品を魅せてくれるのか、いまから待遠しい限りだ。

一通り話が終わったら、Nicoが先ほどから私のカメラを持っていて撮る気漫々だったこともあるのだが、Paulの方から写真を撮ろうねと云ってくれて、「これ"ナイコン"カメラですよ」と私が云うと「"ニコン"だよ、日本語では」「ええ、そうです。日本語では"ニコン"」なんて会話をして、私から1枚。写真を撮っている間、BAMのときと同じようにずっと手を繋いでいてくれました。しかも今回は恋人握りです!!!! もお、泡吹いて倒れそう。そしてNico、BPさんとも1枚ずつ写真を撮影。写真を撮るために床に置きっぱなしになっていた私の荷物を気遣ってくれたり、なんだかとっても優しいPaulです。

完全に狼狽えて舞い上がっていたので、その後どういう風にお別れしたのか記憶が曖昧。何か失礼なことをしてかしていないといいいのですが。。

夜も更けてきたのでまだ地下鉄は動いているがタクシーでもいいか、と20分くらいタクシーを探しながら3人で駅の方へ歩き出す。結局タクシーは拾えず地下鉄で帰ることに。Nicoのホテルとは路線が違うため、彼とはホームでお別れ。全員分の写真は私のカメラにあるので、必ずメールしてね！と念を押される。

翌日の便で帰国するBPさんとアムス中央駅の前でお別れし、なんだか夢心地のままホテルへ。

翌朝、写真はしっかり2人へメールした。



Homeless



## ◆ 7/22(日) THE GLOVEN Stockholm, Sweden

前日、街歩きの最後に会場の下見。The Glovenは駅から連絡橋で直結しており、会場となるEricsson Globeを中心に他にもホールやホテル、ショッピングセンターがある。雰囲気としてはさいたまスーパーアリーナみたいな感じといったところか？ 巨大なドームとなっているEricsson Globeには、スカイビューという観覧車のようなアトラクションがあった。

Londonから再び参戦するChokuさんと昼食を採ったあと、暫く時間が空くのでGamla stanへ。王宮を中心に仲見世のようにお土産屋さんが軒を連ねる。道幅も仲見世くらい。それに一人分の巾しかない小路が縦横に絡み、王宮前の広場でパッと視界が開ける。Gamla stan、面白いです。

地図で見たよりも各街が近くて、その気になれば中央駅から会場までも歩いていける距離かと思う。

座席が決まっているっていいわ(大笑)、開演1hほど前にゆっくりと会場着。Chokuさんはすでに着席している。2列目の真ん真ん中。私は、発売開始と同時にチケットを買うことができなかったの、5列目Vincentの正面。

何故チケット購入ができなかったのか？ 欧米以外で発行されたカードが使えなかったのだ。それが分かるまで5回くらい、試行錯誤した。さらにカード決済以外の方法での購入というのは、オペレータ対応のうえかなり時間がかかることも判明。そこで最後の頼みの綱とばかり、ChokuさんにSOSを発信したのだった。国外発行カード払いができなかったことは、当地へ行ってからもちよつと困った事態になった。キャッシングができず、コンサート後は現地通貨がほぼ無一文状態になり、まさかのChokuさんのおごりでお疲れ様会をすることになったのだった(とほほ)。

両替はキャッシングが一番、レートが良いのです。



開演を待つ場内

コンサートは約10分遅れくらいで始まった。

Pic. 5 開演前の会場内

いつもどおり、Kodachrome～Gone At Lastでスタート。なんだかPaul、ノリノリですごい飛ばしている。のっけからこんなに張り切って大丈夫なのかしら？ というくらい元気。オーディエンスは去年のEU同様、大人な鑑賞で中盤くらいからやっとなんかスタンディングオベーションが出始める。Pic. 6 Homeless

Hugh Masekelaが、“Bring Him Back Home Mandela”で観客を促して立たせたが、その後は“AI”まで待たなければならなかった。

だからといってノリが悪いワケではない。開演前の写真を見てわかるように、非常に盛り上がっている。

今日のコンサートでは、第1部のPaulソロに若干の変更があった。Gaza Sistersが加わっているのだ！ 女声コーラス付きの"50ways"はとても新鮮だった。(いつからGaza Sistersが加わったのかちよつと記憶が曖昧だったので、チェックしました.....なにを?! 笑)

"Boy in the Bubble"では、Bakithiの見せ場に間違えてRayが出てしまい、Paulに「ギロツ」。ちよつぴりビビっているRayだったが、後日ChokuさんがBakithiにそのことを問うと「あれはあれで面白かったよね。ああいう間違いを突き詰めて新たなアレンジにしてみるのも面白いかもね」と。これが日々進化する源の一つなのかもしれない。

4回のコンサートを通して観て感じたのは、今回のツアーは「Greaceland 25周年記念」ということではあるが、結局彼が一番観せたいのは、ポール・ソロ(=いまの自分)であるということ。

もちろん、決してGreacelandセットで手抜きするということではなく、何よりも2部はリラックスして且つとても楽しんでパフォーマンスしていた。

ただ、初回のDublin: 1st. Encoreで、全バンドメンバーによる"AI"を終えたあと、これでお終いと勘違いした観客がかなり大勢帰ってしまい、「まだ、ある」と本能的に知っているコアなファンだけが2nd. Encoreの"Still Crazy"を聴けたというアクシデントあったらしい。(Chokuさん談)

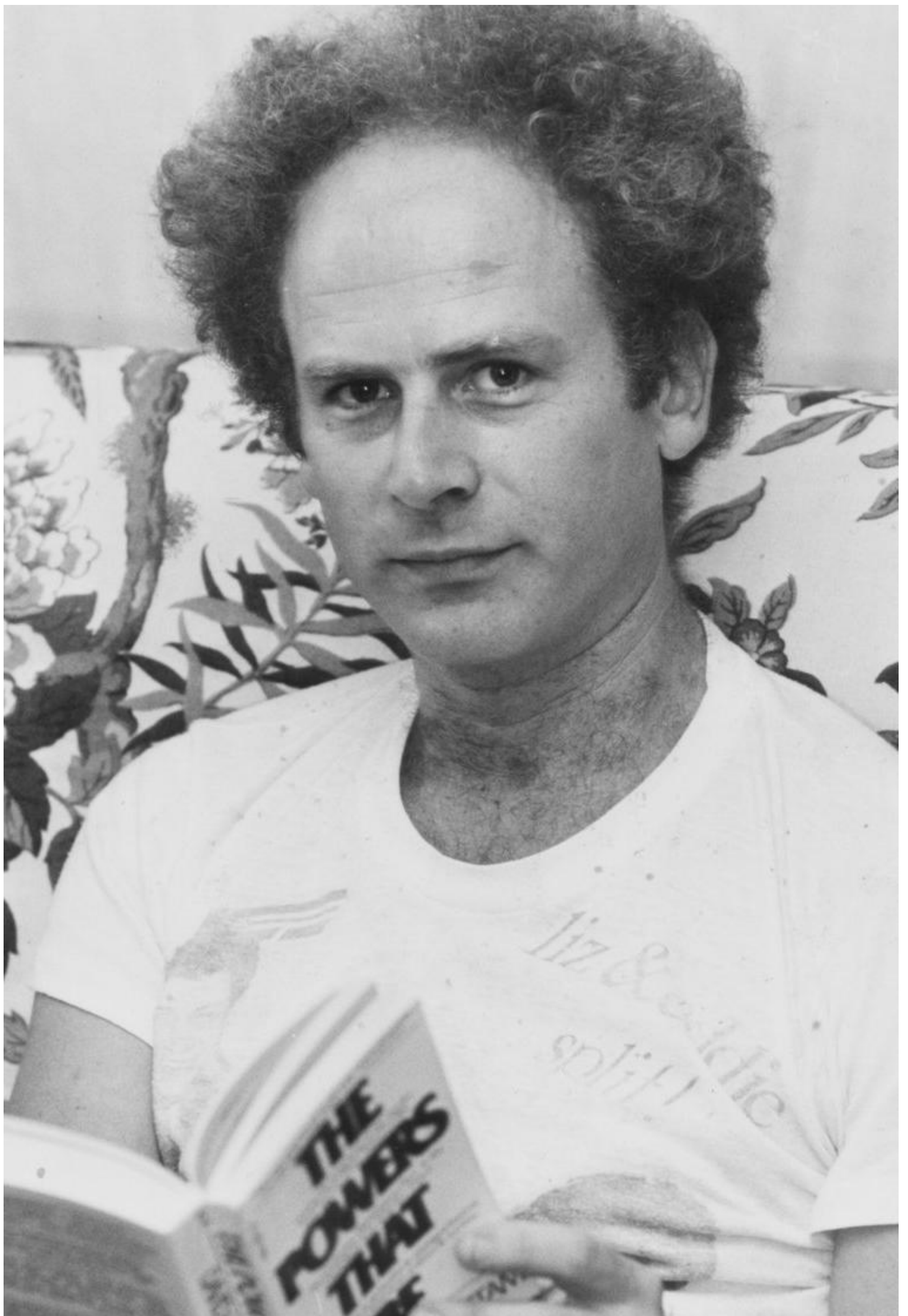
これで分かることは、(1)誤解を避けるためにEncoreは1回だけにしたこと(2)Paulソロで締めくくりたかったこと(3)そのため全メンバーによる“AI”を敢えてセットから外した(と思われる)こと。

今を観せたい、観てほしい — これぞ、Paul Simonである。

新しいアルバムを制作中と前述したが、次はどんな新しいPaulで私たちの前に現れるのか、本当に本当に、楽しみである。

そのあと、あるであろうツアーで、また元気なPaulを観ることができれば至福である。











# ポール・サイモンの休息なき旅

訳：えむばっし

Paul Simon's Restless Journey

By Nicholas Dawidoff August 25, 2011

Rolling Stone India掲載

元記事url：<http://rollingstoneindia.com/features/paul-simon%E2%80%99s-restless-journey/>

## ■出発前

ある冬の午後遅く、ポール・サイモンはコネチカット州ニューカナンにある彼の自宅からほど近い貸りハーサルスタジオで、バンドメンバー8名と仕事に没頭している。

サイモンは自身の11作目のソロアルバム、『So Beautiful or So What』 宣伝のための小規模会場でのツアー用グループの準備をしている。彼のレコード全てと同様、『So Beautiful』は複雑に組み立てられた音程やコードのごった煮（ガンボ）である。また、サイモンはその10曲を主として自身でレコーディングしているため、バンドはその曲を覚えるために集まっていた。1970年以前に遡り、サイモンとアート・ガーファンクルがお互いから自由になろうと決心した時、クイーンズ出身の子供時代からの友人は音楽について完璧主義者であると知られるようになっていた。サウンドに没頭するあまり『ボクサー』のようなシングルの新曲1曲をレコーディングするために数週間をスタジオで過ごしたりもした。サイモンはある朝旧友のポール・マッカートニーが電話してきて、「悪いね、でも

こうしなきゃいけないんだ」と前置きして『ホエン・アイム・シックスティーン・フォー』を歌って聞かせた朝からほぼ6回の誕生日を過ごしているが、音楽に対するアプローチは全く変わっていない。そのことがパーカッショニストとリード・ギタリストが四つんばいになり、一カ所に集まって耳を巨大なスピーカーに押しつけ、謎のコツコツというノイズの正体を解き明かそうとしているかの説明になるだろう。

通常サイモンは、毛羽立ったフェルト地の青いフェドラー帽をかぶり、フードつきのトレーナーを着てリハーサルに現れる。世間的な彼のイメージも、青いものを着て、フードをかぶっているものだろう。「唯一面白いのは作品なんだ」と彼は語る。現在のところ、バンドは『Rewrite』に没頭している。『So Beautiful』収録の一見すると静かな曲で、自分たちの過去に起きたトラブルの現場に戻って物事を変えたいという強い願望と向き合ったものだ。作曲時、サイモンはリズムかメロディから書きはじめる。詞は最後だ。サウンドが彼にとって一番の興味の対象である。こうしたことから以前の曲の"The Boy in the Bubble and the baby with the baboon heart"のような有名な一節では、言葉があまりにリズムミックでほとんどリズムそのものとなっているのだ。このスタジオでバンドは、サイモンが新曲に重ね合わせた全ての音を再現することに取り組んでいる。ギターやドラムの音、そしてグラスハープやアングルのような目立たない楽器の音、さらにはポールの妻である歌手のイーディ・ブリケルがアフリカでの家族旅行の時に小さなデジタル録音機で録っていた周囲の雑音である。虫の鳴き声、テントのジッパーの音、ヌーのうなり声のような。サイモンはこう話す。「ヌーの声はサウンドを変えるために入れたんだ。気づく人はいないと思うけれど、テクスチャーが変わると曲がはつきり聞き取れるようになるんだよ。これらの音がないと、僕が単に室内でギターを弾いているようになってしまって、好きじゃないんだ。だから雰囲気を加えた。アフリカの夜を入れたんだ」



こうしたことは全て、サイモンのバンドの名手たちにとっては問題ではない。しかし、サウンドエンジニアがアルバムからトラックを再生した時に皆に聞こえた微かな『ゾッゾッゾッゾッ』という音は何だろう。サイモンすら確信は持てない。「レコードと全く同じである必要はないんだ」まごついたミュージシャン達にサイモンは言った。「シンプルで、ちょっと不気味な感じにしてくれば」。しかしバンドが『リライト』を練習していると、サイモンは曲を改善するために平均20秒毎に演奏を止めさせた。細部に対する彼の注意力は、ミュージカル『ケープマン』リハーサル時も同様だった。その時彼は関係者一同を30分間待たせて、劇場を調べ、音響をテストし、ヒョウタン楽器のための理想的な場所を探したのだ。作曲に対する自身のアプローチをポール・マッカートニーのそれと比べて、こう語った。「マッカートニーは僕と同じ風には考えていない。彼は自分の衝動を捉えたいんだ。僕は、一曲に喜んで1年半を費やす。降参するか打ち負かすかするまで、その曲と格闘する気なんだ。こうおもうんだ、『やった、見つけたぞ!』てね」

サイモンの残り少ない頭髮は灰色になっているが、それ以外の基本的な特徴は損なわれずに残っている。ずっと被ったままの野球帽のひさしの下には物静かな目、抜け目なく表現豊かな眉、胸部の発達したボクサーのような体つき、しばしばすぼめられ、注意深さを感じさせる口元。身長が5フィート4インチのサイモンは、自分がロックスターに見えるという幻想は抱いていない。かつては自分の外見を嫌うあまり、自身の写真を見るのを拒絶していた時期もあった。マッカートニーはこう話す。「そう見えないなら、ロックスターというゲームはしない方が楽なんだ。サイモンはプロフェッショナルに見える。文学を教える彼は想像できるよね。名声というゲームは、見る人にとっての伝説を信じさせて、制御不能になってしまうんだ。彼には防護壁が内蔵されているね。」スタジオで、サイモンは無表情でさりげなく振舞う。リハーサル中のある時、バンドの最年少メンバーのジム・オブロンがドラムスティックを下ろし、マイクに向けてメロディに被せてリフを演奏しだした。

「こうしたら、ショーの後女の子がもっと寄って来るかなあ？」とオブロンは尋ねた。

「入るバンドを間違ったな」とサイモンは告げた。「そして少なくとも10年は遅かったよ」

つい先日、スティーリ・ダンのドナルド・フェイゲン（数十年にわたってサイモンの作品を称えているが、直接にはサイモンをほとんど知らない）が、サイモンの子供時代について自然な説を提示した。「ある種のニューヨークのユダヤ人にとってはね」と彼は話し始めた。「ほとんどステレオタイプとっていいんだけど、音楽と野球がとても重要なんだ。自分はそれは両親に関係していると考えている。両親は自身をアウトサイダーのように感じていた移民や、一世のアメリカ人だった。同化することが基本となる思想だった。代替的な文化を求めてブラック・ミュージックや野球に引き寄せられていた。両親は僕の髪をクルーカットにするよう強いて、僕に宇宙飛行士になって欲しかった。ポールも同じ目にあっても驚かないね」

それをサイモンに話したところ、フェイゲンは真実から遠くない所を突いたと言った。サイモンの両親は一世のユダヤ系アメリカ人だった。母親のベルはクイーンズ小学校で教えていて、父親のルーは『食卓に食べ物を並べる』ためにプロのミュージシャンとしてバスを演奏していた。彼らはキューガーデンヒルの70番通りにある、単色で同じ形の連棟低層建築のレンガ造りの家に暮らしていた。しかしサイモンにとっては子供時代は素晴らしい鮮やかな色に彩られたものだった。野球選手や不良たち（「僕は不良グループに入りたかった」）、街角に立つドゥワップグループ、サテンのように輝く夏の日、澄んだ冬の夜。「僕は光に本当に夢中になっていた。通りを渡った所に、数多く家が新築されていた。夜には雪が降った。僕はベッドに横になっていた。作業員たちはたき火をしていた。たき火の光が雪に当たって広がって見えて、天井を横切った。僕はそれが大好きだった。オレンジ色で揺らめいて」

少年時代にすでにサイモンは自分と同じことをするのが好きだけれど、その手法が異なる人間に並はずれた興味を示していたと、大昔に指摘したのはアート・ガーファンクルその人だった。子供時代、サイモンは野球グローブをシュウイン社の自転車のハンドルに乗せ、スポークに野球カードを差し込んで（エンジンのような音を立てるために）キューガーデンを出発し、遠く離れたイタリア系やアイルランド系の住民の多い地区に試合相手を探しに出かけた。見知らぬ校庭はサイモンにとって魅惑的な場所であり、初対面の仲間たちと楽しく過ごした。サイモンはこう話す。「アーティは、『君は異なる地域の子供たちを一番知っている子だよ』とよく言っていたよ。僕は野球をやっていた。自転車に乗っては、スティックボールに熱中していたんだ」サイモンは自身の創造的生活を、基本的に自転車での遠出から着手したのだ。異なった音楽が流れる地域に出入りし、なにか新しいものに反応して。

子供の頃、サイモンは明かりを消した浴室で一人で口ずさみ、タイルの反響を楽しむこともあった。すなわち『Hello darkness, my old friend』しかし彼が野球のペナントが壁に貼ってある自分の寝室で一人で歌っていた時はドアが開いていて、ルー・サイモンがポールがとても良い声をしていると言ったのだ。それまで彼にそう言った人は誰もいなかった。

サイモンの記憶はこうだ。「父はタキシード姿だった。クラブの仕事のため、部屋を出て行った。父はヤンキースファンだった。一緒にラジオで試合を聞いたなあ。いい人だった。楽しくて、面白くて。頭も良かった。僕が自分の子供たちと遊ぶほどは僕と遊ばなかった。夜遅くまで仕事があったから」時々、夜中の2時にルー・サイモンがやっと70番通りに着いた時、どこが自分の家に繋がる小道なのか見分けられずに、間違った道に入りこんでしまうこともあった。「それは父を本当にいらいらさせた。朝は僕たちは静かに過ごさなければいけなかった。父が髭を剃るのをよく見ていた。父はそんな時、『今夜は本当に働きたい気分じゃないよ』と言ったんだ。後に僕も分かるようになったね」とサイモンは話した。

サイモンをロックン・ロールに出会わせたのも野球であった。彼はスコアブックをつけ、レッドソックスのカードは破り捨てる主義といった手合いのヤンキースファンだった。ある日、彼がラジオに聞き入って試合開始を待っていると、DJがこう言った。「新しいレコードがあるんだ。今まで聞いた中で一番ひどい出来だ。この曲がヒットしたら、帽子を食ってやるよ」クロウズのドウワップ曲『Gee』だった。ポールは釘づけになった。彼は「このDJが僕の好きなものをかけたのはこれが初めてだ！」と考えた。

サイモンは自分が好きなもの、そしてその度合いを正確に分かっている絶対的なリスナーだった。最初のお気に入りにはハーヴェイ&ムーングロウズのドウワップヒット、『Sincerely』だった。「手の届かない高みの頂点」不動の2つは、エルビス・プレスリーの『Mystery Train』とボ・ディドリー・ビートだった。いつの日にか辿りつけるかもしれない遙か彼方に瞬く灯台は偉大なアイオワのハーモニーシンガー、ドンとフィル・エヴァリーだった。サイモンはこう話す。「子供時代は全然詩に親しんでいなかった。でも僕が聞いていたミュージックはある種の詩を思い起こさせるものだった。とてもミステリアスなものに思えた。喜ばしい謎にね。エルビス・プレスリーは自分が聞いた中で一番変な名前の一つだと考えてたよ」サイモンは自身の声というものを見極めようと、これらを全てより分けて調べていく中で、自分にはプレスリーのような野卑で南部風の音は出せないと悟った。それでサム・クックやクライド・マクファターフリートウッズといったよりソフトな者たちの道を進むことにしたのだ。

少年時代サイモンが好きだったサウンドは、今でも全てが彼の中で新鮮なままだ。そして彼はその音から今でもヒントを得ている。新アルバムのタイトル曲『So Beautiful or So What』は「ボ・ディドリー・リズムの中でもお気に入り」を主役に据えている。（またこれはマイルス・デイヴィスの曲『So What』にも言及している）



初期の作品で、サイモンは自身のお気に入りのドウワップグループの名前をよく挙げていた。彼の作品は音楽の大変広い地平に関係し、時折彼を『カルチャーからカルチャーへ飛びまわっている奴』だという非難の元になることもあった。しかし彼にとって、新しいものに出会ってそれが気に入った場合、魅力の不可避な部分は全く知らないものというものではなかった。1985年にサイモンが南アフリカを旅し、レディスミス・ブラック・マンバゾと仕事を始めた時のことだが、彼らのハーモニーは子供時代のドウワップとよく似ており、サイモンにとって『とても親しみ深い』サウンドであると気付いたのだ。

サイモン&ガーファンクルは小学校での『不思議の国のアリス』の劇で出会った。サイモンは白ウサギを、ガーファンクルはチェシャ猫を演じた。（音楽学者はいつかこのことについて何か言いたくなるかもしれないが、そうすべきではない）すぐに少年二人は地下室でたむろして、エヴァリー・ブラザーズをコピーするようになった。ほとんどの人がポップソングを歌うことを真面目な音楽的試みとは考えていなかった当時でも、ロックンロールには自分たちの声を調和させるのが好きなティーンエイジャー二人にとってクリエイティブな可能性が無限にあるという信念を彼らは共に抱いていた。当時既に、彼らは音楽への献身に対してプロ的な感覚であった。彼らはどんなことでもした。サイモンはこう話す。「タレント・ショーに出るため、野球の練習を休んだことがあったんだ。野球コーチはそれが気に入らなかった。コーチはこう言った。『ポール、野球をしたいのか歌を歌いたいのか決断すべきだ。シリアスに考えるんだ、ポール』」

16歳の時、トム&ジェリーの名で、彼らは最初のヒット曲であるティーンエイジ的な誘惑の曲、『Hey, Schoolgirl』を出した。サイモン&ガーファンクルとしては、ヒット曲を出すまで長い時が掛かった。ガーファンクルがコロンビア大学で数学を追求している間、サイモンはクイーンズカレッジで英文学を学んだり、音楽業界で働いたりしていた。雇い主のひとつはエイミー・レコードであり、ブリルビルディングの近くのブロードウェイにある小さな会社だった。「大学が終わると街に出て、送られてきたマスターテープを聞いた。レコード会社がどこにあるか知っていた。どん底だったんだ。どうにもできなかった。僕が受け入れた曲はなかった」翌年は、音楽出版社E.B.マークス社に雇われ、同社の取扱曲から『The Peanuts Vendor』のような陳腐でくたびれた曲をレコード会社に売り歩いた。「一曲も売れなかった。ロックンロールの時代だったからね。売る物がなにもないと落ち込んだ。それで自分で歌を作ってそれを出版させたんだ」とポールは語った。

レコード会社の担当者に面会するたびに、サイモンはレポートを作成しなければならなかった。ある日、E.B.マークス社の社主がサイモンに電話してきて、こう尋ねた。「このレポートを書いたのは誰だ？」サイモンは自分だと答えた。相手は「いや、君じゃないだろ」。サイモン「いいえ、私が書きました」相手は「いや、君は書いていない。あまりにも良い出来だからね」と言い張った。サイモンはカッとなって、相手にこう言った。「英文学を専攻したんだよ。ちくしょう、辞めてやる！」彼は決意した。それ以降、自分の曲は全て自分自身で出版するということを。彼は次にコロンビアレコードに向かい、プロデューサーのトム・ウィルソンに面会した。ウィルソンはサイモンに「このピルグリムズというグループに曲を使用したい」と語った。サイモンは「友達と歌いたいです。歌ってみせてもいいですか？」と言った。ウィルソンは了承した。「それで、アーティと僕は『サウンド・オブ・サイレンス』を歌ったんだ。僕たちが歌ったら、驚いたことに、彼らは僕たちと契約したんだ」

1964年のことだった。コロンビアレコードはアルバム『水曜の朝、午前3時』をリリースした。当初そのアルバムは暗礁に乗り上げていた。サイモンは言った。「当時すでにビートルズが存在し、ストーンズが存在し、ディランが存在していた。割り込む隙なんてないようだった。飼葉桶までたどりつけなかったよ。彼らが全土をカバーしていたからね。ただ、彼らは僕たちがしたことはやっていた。ニューヨークのドウワップはね。」



ウィルソンはスタジオに戻り、サイモン&ガーファンクルには無断で『サウンド・オブ・サイレンス』にロックインストを加え、再リリースした。そして1966年のある土曜の夜のことだが、親友同士が二人、サイモンの車に乗って、キューガーデンヒルズの静かな街角に停車していた。ギグも、デートの予定もなく、行くべき場所もするべきこともなかったのだ。カーラジオをつけてお喋りしていると、DJが全米のその週のトップヒットを締めくくるところだった。最後に第一位が発表された。"Hello darkness, my old friend," とその曲は始まった。

ガーファンクルが先に口を開いた。「そいつらは今頃、『大物の』生活をしているだろうよ！」

サイモンは今でもこの思い出が大好きだ。「アーティってやつは！ 彼はおかしいんだよ。皆は僕たちがお互いに我慢できない、うまくやっていけないという考えに賛成してるんだって思っているけど。僕たちは親友だったんだ。アーティのように僕を笑わせたやつは他には誰もいないんだ」

サイモン&ガーファンクルとはサイモンによると「途方もない冒険だった。旅だけにしたって、飛行機に乗って一度も行ったことのない場所に行くんだもの。最初のうち、僕たちはホリデイ・インに泊るのだからワクワクしていた。「見るよすごい、揺れるベッドだ！」ってね。子供たちがパーティに招待してくれた。僕たちは数歳しか年上じゃなかったけど。アーティは時々ギグをヒッチハイクで移動したんだ。

6年間に発表した5枚のアルバムによって、サイモン&ガーファンクルはアメリカ音楽史上もっともメロディックで、美しく織り合わされたハーモニーを生み出した。その過程の中で、二人は音楽上の兄弟のようなものとなった。サイモンはこう語る。「僕たちは本当に独特の声のブレンドを作りだした。あのブレンドは人を引き戻すんだ」しかし共同制作の報いとして、二人は引き離された。どちらも頑固で頭の切れが良く、聡明で繊細だった。「これまで色々な原因でアーティと酷い喧嘩をしたんだ」とサイモンは話す。「芸術面が原因のこともあった。けどアーティは書かないからね。『明日に架ける橋』以前には本当の意味での争いはなかったんだ。あの時はアーティは映画も撮っていて、やることを色々抱え込んでいたんだ」

その映画とは『キャッチ22』で、『卒業』用に『ミセス・ロビンソン』を依頼したマイク・ニコルズの監督作だった。サイモンが全ての曲を書いていたので、ガーファンクルが芸術的な独立を少々欲したのかもしれないとは理解できるところだ。自分に割り当てられたパートを単に解釈するのではなく、彼自身のための役割を作り出したいと。しかしメキシコのソノラ州でガーファンクルが自分のシーンに向けてニコルズを待って待って待ち続けている間に、サイモンは手助けなしで次のアルバムに取組み、見捨てられた気持ちになっていた。サイモンは最後の曲の一つをサイモン&ガーファンクルに当てはめた。『ニューヨークの少年』で、“トム”は歌手を“微笑む以外今日は何もすることがない”状態に残してメキシコへと飛ぶ。ガーファンクルがメキシコにいる間にポールが作っていた他のものは、彼が今でもガーファンクルの声のみが『特別に適している』と感じている、天駆けるような賛美歌であった。レコードが世に出た後は、ガーファンクルがステージに立ち『明日に架ける橋』を歌い、そのときサイモンは舞台の袖に立ち、拍手喝采のほとぼしりを予期しながら、「あれは『僕の』書いた曲なんだよ、クソッ」と考えるようになったのだった。

まもなくこの友人たちは道を別にした。「サイモン&ガーファンクルは地雷原なんだ。デュオでいるってのはとても大変なんだ。サイモン&ガーファンクルの解散で、僕はとても解放された」と現在のサイモンは語った。



40年後までに、『明日に架ける橋』はラジオで700万回以上放送された。合計するとサイモン作の曲は1億回以上放送されている。彼の16作のアルバムのうち3作『明日に架ける橋』、『時の流れに』、『グレイスランド』はグラミー賞最優秀アルバムを受賞した。そしてケネディセンターや米国議会図書館といったところから、十分な数の生涯功労賞も受賞した。サイモンが1963年に1年間の『無駄な年』の後でブルックリンの法学校を後にし、ギターとスーツケースのみを手にしてヒッチハイクでアメリカを探しに出発したことを軽率な行動だったと示唆する者は誰もいない。

ただ、今でもサイモンについての汚名はあり、それは批評家界限がサイモンは十分苦しんでいないと思っていると要約できるかもしれない。不満点にはサイモンは教養がありすぎ、真面目すぎ、神経症的すぎで、要するに、音楽評論家に似すぎているのだ。「彼はこれまでずっと頭の良い、ブルジョア的な、細かいことにこだわる意気地なしだった。自称ロッカーの中には彼の顔に砂を蹴りつきたいと思う者もいることだろう」とは、以前ニューヨーク・タイムズ紙でジョン・パレスがサイモンを描写した表現だ。インスピレーションを求めたサイモンが1985年にアパルトヘイト下の南アフリカに、地元の黒人ミュージシャンとレコーディングを行うために渡った時には、アメリカ人批評家たちは彼を文化的日和見主義者と呼んだ。そしてブロードウェイミュージカル『ケープマン』に取り組むことで1990年代早期を費やした時には、過干渉の、病的に自己中心的な人間だと描写した。

サイモンはたつぷりと、同時にきめ細かく世界を体験しているので、アメリカのポピュラーミュージックの中心で50年以上にわたって蓄積してきた鮮烈な印象を想像するのはたやすい。サイモンはステイヴン・ソンドハイム氏が最近出版した回顧録『Finishing the Hat』で行った、難しく実に面白い復讐を称賛しているが、サイモン自身からはそのような暴露は一切期待できない。現在の彼は晩秋の小説家のように見える。これまでと同様熱心に働きながらも、家族や友人、日々の新聞がもたらす満ち足りた喜びも享受する。セントラルパークを見下ろすペントハウスのデュプレクスを引き払い、郊外住宅地に引っ越した。彼をニューケーナンの少年と呼ぶ方が適している生活に。今ではほとんどの作曲を車の中で行っている。音響で選んだ黒のSUVの中だ。3人の子供たちを車に乗せる時に歌い良いことを思いつくと帰宅まで覚えておく。マンハッタン中心部のオフィスに腰を下ろし、サイモンは私に「自分の人生や、自分の過去についてはあまり話さないんだ」と語った。耳になじんだ彼の声が、穏やかにマンハッタン以外のアクセントを帯びて『自分の過去』と語るのを聞くと、私はサイモンの『ゴーン・アット・ラスト』に出てくる、『自分の過去を考える』ために雪の夜トラック・ストップに避難してる疲れた男を思い出した。

人生の失望に立ち向かう、傷つきながらも回復力のある人間についてサイモンが歌うのを長年聞いてきた者は、70歳の誕生日を迎えた今でも彼の声の響きが変わらないことを肯定するだろう。彼が語尾まではっきりと発音することや、会話の中によく入れる小休止を聞けば、明瞭さや感情についての正確さが彼にとって重大なものとなやすく理解できるだろう。彼の声は声量の制約を欠点と責められることもよくあったが、ニューヨーク的なキャラクターとしては利点となっている。現実の時間内でもニューヨーク市アッパーウエストサイドがウッディ・アレンの映画のように感じるように、ニューヨーカーの口から出る言葉をポール・サイモンの歌詞のように見ることはたやすい。例えば理容師が『OKに思えますよ』と行ったり、コーヒーショップの列に並んだ女性が『この人にちょっと用があったのよ』と場所を変えるなど。

しかしサイモンは自身の声の人々が彼につらく当たる一因だと信じている。「僕の欠点の一つは、僕の声は誠実で正直に聞こえるってことなんだ。アイロニックな響きを持たせようと試したこともある。そうならなかった。できないんだ。例えばディランの歌うものには全て二つの意味がある。彼は君に真実を告げると同時に君をからかっている。僕はいつだって正直に聞こえてしまう。ロックンロールはイメージに多大に影響される。イメージに弱点があると、作品のあらさがしをされるんだ。



サイモンはプロの歌手となって以来、ディランとならないことについてとりわけ非難を受けて来た。「僕とディランの間には、ずっとある種の比較があるんだ。僕はたいてい二番手でね。僕は二番目になるのは好きじゃないんだ。本当に本当の初期、僕たちがコロンビア社と契約した頃は、ディランの作品を崇めていた。『サウンド・オブ・サイレンス』はディランがなかったら決して書かれなかったろう。でもその気持ちは『卒業』と『ミセス・ロビンソン』のあたりで薄らいだんだ。あの作品はもうフォークソングじゃなかった。

サイモンのオフィスはブロードウェイのブリル・ビルディングに入っている。サイモンがクイーンズから地下鉄でマンハッタンに通い、歌の営業マンをしていた当時、ポピュラーソングのソングライターにとってブリル・ビルディングは今日のコンピュータプログラマーにとってのシリコンヴァレーのようなものだった。天井にはアールデコのランプがとりつけられ、イタリア製の椅子、植物、アジア調の衝立、そこでなされた多くの仕事の影を見せないデスク、それよりは使用感のあるピアノがある。サイモンの手元には、ブルース・スプリングスティーンやシルヴィア・プラス（アメリカの女性詩人）の伝記本がジョン・ベリーマンの詩集と一緒に山積みになっている。サイモンは友人である詩人ビリー・コリンズに賛成している。歌詞は詩ではないということに。コリンズはこう話す。「別のものを動きのある詩や、その類とって持ち上げて褒めるように見せるのは好きじゃないんだ。ロックの歌詞にはそのものに独特の基準があると思っているから。例えば『青い影 (Whiter Shade of Pale)』はその意味は分からないけれど、とにかく素晴らしい歌だし」しかしポール・マッカートニーはそれに反対だ。「彼は詩人だよ！」とサイモンについて話す。「詩に対してのルールがソングライターに対しても適用される。簡潔さ、表現法、リズム。アレン・ギンズバーグはいつも聞き手に「これは歌なのか詩なのか？」と言わせたがっている。歌なら、そのまま放っておいてくれる。詩なら、粉々に打ち砕いてしまうんだ」

有名であることに関しては、日用品を買いに出かけるとき、サイモンは今でも自分が誰にも気づかれずに店内を歩いていると確信している。そして、買い物後に、彼に声をかける人を見つけてうろたえるのだ。「ポール・マッカートニーは誰かが自分を見ているということをいつだって自覚している。自分は自分を見つめる人がいるなんて思ったことがないんだ。ナイーブなんだよ」自身の生活から私的なテーマを作品に取り上げる多くの内気な作者と同様、人生よりも歌詞として歌の下敷きにした自画像の閃きをサイモンの中で無関係とする必要があるようだ。「もう自伝的な曲を作ることはまずないんだ」とサイモンは話す。しかしスーパーマーケットのレジ待ちの列で人々がサイモンに声をかけるのは、ひとつにはいつの世も最も魅惑的な題材、不幸なロマンスについて名曲を書いてきたからだ。サイモン&ガーファングルの人気曲の中で、『キャシーの歌』と『アメリカ』はサイモンの以前のガールフレンドであるキャシー・チッティーを中心に行っている。サイモンの友人で、サタディ・ナイト・ライブのプロデューサーであるローン・マイケルズは、「サイモンと知り合う前に、（歌を通じて）キャシーを知ったんだ」と多くのファンと共通する意見を表明した。サイモンは『明日に架ける橋』の『Sail on, silver girl』で始まる最後のヴァースを、白髪を数本見つけた最初の妻、ペギー・ハーパーにちなんで書いた。二番目の妻である女優キャリー・フィッシャーを念頭に作られた、壊れた愛についてのラブソングの数々、『ハーツ・アンド・ボーンズ』、『アレジ』、『シー・ムーブズ・オン』（この曲では、サイモンは『彼女の冷たいコーヒー色の瞳の中で見捨てられた』男を登場させている）

このことはもちろん、永遠の名曲の着想となった死すべき人間たちにとって、辛いものとなり得る。個人史とイマジネーションとの相互作用について話し合っている時、サイモンの『誰も傷つけない』ようにしたいという欲求は常に秘密の公表を上まわった。私がサイモンに『I Do It for Your Love』について尋ねた時、彼はこう答えた。「あれは最初の妻ペギーについての曲だ。僕はペギーに出会って……これ以上は言わない方がいいね！」ハーパーはイーストテネシーヒルズの小村出身の控えめな女性だった。対照的にキャリー・フィッシャーは、ずっと全てに興味を持って人生を過ごしてきたような、ハリウッドの元プリンセスだった。



キャリアは以前、共に過ごした12年間にサイモンが『多くを我慢しなければならなかったか』を説明するため、彼を『魔法のような人』と書き、自分のことは『ビッチ』と表現した。サイモンの反応は？ 「キャリアについては話したくないんだ。彼女を好きじゃないってことじゃない。僕は彼女を嫌ってはいない。それに入り込みたくないだけなんだ。彼女は作家だ。彼女には自分の人生に対する権利と、それを思い通りに書く権利があるんだ」

自身の私生活を自分自身のものにしておくほど、より良質の生活ができるというサイモンの認識が消えることはない。「ある時点で、自分の生活とプライベートな出来事について、他の誰かの楽しみとなるのは不適當なんだと分かり始めるものだ。どんなふうに傷ついたか、どう感じたかを言う必要はないのだから。若いころに犯しがちな過ちだ。エミネムは自分の家族や子供についておおっぴらに話しているけど、10～15年後にはきっと後悔するだろうと思うよ」サイモンは子供について話すことも拒絶した。彼の長男であるハーパーについても。彼は14歳でグレイスランドツアーに父親と同行して以来、ずっと自身をミュージシャンと定義するために苦闘してきたのだ。ハーパーはこう語った。「父の作ったハードルはとても高いんだ。そのレベルに達せないのなら、なぜ挑戦するんだろうね」

サイモンのオフィスの入り口付近に、額装された野球選手の写真が飾られている。ジャッキー・ロビンソン、黒人リーグのスター選手バック・オニール、ミッキー・マントル、ジョー・ディマジオ、他にはニューヨーク・ヤンキースの選手たち。「野球が好きなんだ。僕のお気に入りだ。命の終わりを迎えるとき、自分の人生は音楽と野球だったと思う。そうなるだろうね」と彼は話す。サイモンが野球について最も興味を感じているのはボールの軌跡(ライン)だ。「バットがボールを完璧に捉えて打った時の感覚は、感じるができない。完璧な歌詞(ライン)を書くようなものだ。感じることもできないんだ。『Ahhh!』と思うだけ。完全に簡潔。経験したことのない者には理解できないことだ」ご最良選手はマントルで、彼はサイモンとあった時に、自分のファンなら、なぜディマジオを選んで歌の中で不朽の存在にしたのかを知りたがった。サイモンは音節について説明し、それはしばらくの間良い話題となった。イタリアンレストランでディマジオに遭遇した時は、ヤンキー・クリッパーからも質問があった。「Where have you gone?、とはどんな意味だい？」彼はサイモンに自分がどこにも行ってしまっていないと教えた。ミスター・コーヒー社の広告もしていたのだ。サイモンはディマジオに失われつつあるヒーローの可能性について語った。その歌詞そのものについて、26歳のサイモンがどう思いついたかについてだが、サイモンが現在に至るまで言えるのは「どこから来たのかは分からないが、突然そこにあったんだ」ということだけである。

オフィスの角の近くの壁、野球選手の写真の近くに、コントラバスが立てかけてある。あまりに巨大な楽器なので、一度気づいたが最後、部屋にのしかかっているように思える。サイモンはそれは父親のものだと語る。サイモンにとって父親は今でも強い存在感をもっているのだ。ニューヨークタイムズ紙はかつてこの父子は『苦しい関係にあることで有名』と書いたことがあった。特にサイモンが、ルー・サイモンがとるに足りないと考えた種類の音楽を作ることによって有名になってからはそう言われるようになった。それは真実ではない。サイモンは憤慨もあらわに言った。「父は驚いていたし、僕のことでも喜んでいてくれたと思う。両親との関係はとても良かった。父との関係は多少複雑だったけれど、確かに愛情に満ちたものだった。有名である事が原因だったと思う。母にとってはそれは純粋な喜びだった。父は、決してそうは言わなかったけれど、もうたくさん、という地点に達してしまっただ。僕が覚えているのはこの事だけ。父は僕の考え方と人生に一番強い影響を与えた人なんだけど、彼はこう言ったんだ。「もちろん、お前のことで幸せだよ。成功についてどうこう言うつもりはない。しかしこれがお前の本当になりたかったものなのか？ ロックスターになりたかったのか？」僕は言った。「そうだよ。だめなの？ 何になるべきだったの？ 何になってほしかったの？」父は言った。「A teacher」

1970年代の終わりごろ、ルー・サイモンは突然コントラバスを止め、ニューヨーク大学に入り学業に戻った。言語学の博士号を取得し、シティカレッジの教育学教授となった。「複雑な話なんだ。ずっとミュージシャンだった男がいる。50代で音楽から離れ、特別博士号を取る。彼自身としてスターなんだけど、彼はポール・サイモンの父親でもあるんだ。彼にとって複雑なことだった」サイモンは間をおいた。「父親が何を考えているか知るのはとても難しいね。父が死んだとき、僕はセントルシアで仕事をしていた。父はずっと体調が良くなかった。昼寝をされていて亡くなったんだ」

サイモンのオフィス全体のところどころに、アーティ、ディオ、アル・ゴア、ローン・マイケルズ、フィリップ・グラス、レオナルド・バーンシュタイン、ブラジル人歌手のミルトン・ナスシメント、スマザーズ・ブラザーズ、ケイト・スミス、妻や子供たちの写真が飾ってある。立派なクルミ材のキャビネットが、『コダクローム』発表の頃のハイファイセットを囲んでいる。「古いものなんだ」サイモンはステレオについて話した。「自分はハイテク好きってわけじゃないからね」壁には、サイモンの母親の手による、サイモンの週末の姿の水彩ポートレイト、『明日に架ける橋』のストリングス用のアレンジ譜が額装されて飾られている。コンポーザーが慌てて『Like a Pitcher of Water』とタイトルをミスしているものだ。そしてジョージ・ガーシュウィンからの手紙も。その中で、彼は自分を会計主任のワッテンバーグに売り込んでいる。『我々のアステアの映画、“Shall We Dance”は一級品のようだ』

サイモンは微笑む。「ソングライターは不安定なんだ。安定したライターと会ったことはない。皆競争心が強くて、自分たちについて人がどう言うか気にしている。そうすると人はおかしくなるんだ」彼にとってもそうなのだろうか？「自分が不安定だとは断じて思っていないよ」と静かに応えた。私は彼は周辺部を好む、自信を持った人に見えると言った。「周辺部が真実なんだよ」と彼は言った。私は彼が自身の映画とアルバムであった『ワン・トリック・ポニー』の失敗と、同時に起こったキャリー・フィッシャーとの関係との崩壊の後に、かつて語った『固定化した』抑うつ状態に触れた。彼はさらに静かに話した。「落ち込んでいた時期は何度かあった。自己不信の時期がなかったとも言わない。自分が楽天的だったとは決して言わない」

サイモンの自身の名を関した1972年の素晴らしいソロデビューアルバムのカバー写真、パーカーの毛皮の太い縁取りで半ば隠れた彼の顔を思い出すまでもなく、彼は少し自身に厳しい人間だと分かることだろう。長いキャリアの中で、彼がこそこそしていたように見えたことがあるとすれば、彼が何事に対しても本当に無関心ではいられないからである。ソングライターのランディ・ニューマンは、ロングアイランドでのウィッフルボール大会でキャッチャーを務めた。サイモンがバッターになったときのことを思い出した。「彼の独り言が聞こえたよ」と回想した。彼はサイモンと数年にわたってぎっくばらんに付き合っている。「本当に競争心が強い。異常なほど競争心が強い。彼は物事に勝ちたいんだ」サイモンが自分でも強調することが多いように、彼の音楽が彼の最良のものだ。「自分が本当の最悪野郎 (asshole) になって、あとでそれを後悔するのは対照的にね。有名人は誰でも時には最低の人間になるけれど、どうしてそうなるのかが唯一興味深い点なんだ」

サイモンの良い曲を知る者は皆、不完全な男と女がどうしてそうなるのかの問いに、彼が音楽的に力を注いできたと分かっている。脆さが彼の重要なテーマだ。偉大なアーティストが皆そうであるように、解決よりその過程を重要視して、感情の極々微細な点に関心を抱く。作品のキャラクターはしおれた、無防備で傷つきやすい人々で、自分の希望を繋ごうとしたり(“I do believe, if I hadn't met you, I might still be sinking fast”), 繋がり求めたりしている。ビリー・コリンズのようにサイモンを知る人にとって、サイモンは『検査された生活の好例』だそうだ。私はスタジオである早めの晩に、サイモンが彼の人生の長い期間の方向感覚を失った期間が、完璧な歌の一節になったかを話してくれたときにそのことがよく分かった。



10年ほど前、サイモンは突然自己嫌悪に圧倒された。「本当に自分自身を攻撃したんだ。手荒い攻撃だった。誰にも言わなかった。自分自身の中の声を実際に僕を攻撃しているようだった」内からの攻撃から身を守ろうとしても、その声はそれを許さなかった。「お前は間違った。これは審理の段階じゃない。判決なんだ。お前がいくらうまく喋ろうと我々は関心が無い。そんなものは上っ面の隠蔽なんだから」

当時、サイモンは両手に痛みを伴うトラブルを抱え、将来楽器を弾けるか不安だった。医師を訪ね、理学的診察が済んだ後、サイモンは自分がしてきたこと全てが間違っていたと感じさせる声のことを話した。医師はサイモンに、慣例にないことをして対処する気があるかと尋ねた。確かに、とサイモン。その医師は素晴らしい腕前の元精神科医を知っていた。その元医師は自身の診療所を閉め、バルチモアで教会の仕事をしていた。サイモンはその男性に電話をした。「彼に、自分の自我に対する攻撃のことを全て話したんだ」バルチモアの男は、途方もなく辛らつな内部からの声が聞こえることは、ライターにとってはあまり珍しくはない経験なのだと答えた。そしてサイモンに、滑稽と感じる声、例えばバッグスバニーの声を選んで、その辛らつな声をバッグズのものとして考えてみてごらんと指示した。それから、その声の信管は取り除いたと考えて、靴底で踏みつけてしまいなさい、と。

サイモンはこう話す。「彼の話の要点を理解した。自分の内部からの声だから、人は騙されるんだ。人が自分を非難したり、傷をくまなくつつくのは珍しくはないんだ。人は自分を本当に傷つけることができる。『自分をあまり気にしないように』の別の言い方だね。いいアドバイスだったよ」このアイデアは後にアルバム『サプライズ』中の『Sure Don't Feel Like Love』での『Who's that conscience sticking on the sole of my shoe?』にも現れている。

リハーサルスタジオでの別の会話のとき、サイモンは私に『ジャコメッティの肖像』について語った。数年前に読んだが、今でも大変新鮮だとのことだ。この本は作家のジェームズ・ロードが、友人であるスイス人アーティストのアルベルト・ジャコメッティのモデルとなったときの記録だ。サイモンは熱心に詳細を話した。「毎日、ジャコメッティはポートレイトを描きおえては、ひどい出来だと言った。彼が自分を責める度合はとても面白い。僕も自分に対してかなり厳しいけれど、彼は本当に自分をこき下ろしているんだ。どんどん素晴らしくなるのに、『全然承認できない出来だ、無能で無意味な自分の平凡な産物であるこのクズは世界に必要な』と言うんだ。それを何度も何度も『もうそれに触れるなよ、やり遂げているじゃないか』とロードが言うまで続けるんだ。でもやはりジャコメッティはその作品をバラバラにして、もっと素晴らしくするために何度も描きなおすんだ。絶え間ない編集と自己批評。僕はそれが気に入っているんだ」

他のアーティストたちは、ジャコベッティと同様に、サイモンが『素晴らしい大胆さで、全てをぶち壊す』期間の長さに驚かされることがよくある。数年前、サイモンは自身の孤独な傑作の中の1曲、『きみの愛のために』を、ジャズピアニストのハービー・ハンコックが製作中のカバー曲のアルバムのために歌うことに同意した。しかしこの二人のミュージシャンが打ち合わせた結果、サイモンは大胆に曲を改変しようと提案してハンコックを驚かせた。複雑な構造をシングルコードにまとめ、短調に切り替えようと。「僕たちが行ったレコーディングは、彼自身が作曲した曲とは全く別のアイデアによるものだった」とハンコックは驚嘆した。サイモンの音楽的『好奇心』はハンコックに以前のボス、マイルス・デイビスを思い出させた。「マイルスとポールは型に嵌らないんだ。アイデアがいっぱい詰まった頭を持つ天才二人なんだよ」

サイモンは常に、組み合わされた物事がどのように組み合わされたのか、その源流はどこなのかに戻っていくようだ。フロリダの大学で行ったビリー・コリンズとの公開対談で、サイモンは聴衆に向かって『So Beautiful or So What』の新曲『Love and Hard Times』について語った。

そのプロセスの詳細部について話したので、コリンズは「フェラーリのメカニックがエンジンを分解しているようだった。サイモンは自分の音楽がどういう構成なのかについてはっきりとした感覚を持っていた。古くからの質問：音と歌詞、どちらが先？ 彼にとっては明らかにビートが一番最初だ。彼は単なるライミン・サイモンではなく、リズムック・サイモンだ。ギターを手に取り、『ミステリー・トレイン』を演奏し、「僕の音楽の40%はこれをベースにしている」と言った。ほとんどの作家より、サイモンは自分の音楽が異なった影響からの組み合わせであることを認める気持ちがある」と感じた。

既存の音楽を再考し、新旧のサウンドパターンの膨大なパレットを跨いで驚くべき繋がりを生み出すことについて、サイモンは常に時代を一步先んじている。1965年にパリ東劇場で、ペルーのバンドロス・インカスがチャランゴとパンフルートを使ってアンデスのフォークソング『El Condor Pasa』を演奏するのを耳にした。後に彼はサイモン&ガーファクルの『If I Could』に用いた。「その楽器を聴いたことはなかった。とても気に入ったんだ。ほとんどの人の感情が感動を覚える時期の子供時代と同じように、他文化のサウンドやリズムに感動する能力が僕にはあるのかもしれない。

1971年、初のソロアルバムのために、サイモンはパリに行き、伝説的なジャズヴァイオリニストのステファン・グラッペリとブローケン・シュード・シミール『ホーボーズ・ブルース』を録音した。同年にジャマイカに行き、ジミー・クリフのスカ『Vietnam』を聞いた。それはサイモンを刺激し、より小さな家庭内の悲劇についての曲を作らせた。「何かが本当に欲しいなら、それが演奏されている場所に行かなきゃ」キングストンに行った時にサイモンはクリフのバンドメンバー、トゥーツ・アンド・ザ・メイトルズとあった。「彼らに自分の曲を見せて、『これのスカ・バージョンが欲しいんだ』と言った。彼らは『もうスカはやらないんだ』と言った。『これからはなにをやるんだい？』『レゲエだよ』『どんなサウンドなんだい？』彼らは演奏した。僕は『それで行こう！』と言ったんだ」サイモンの曲のタイトルはそれ自身が意味ありげな起源へのほのめかしである。チャイナタウンのレストランのメニューで、鶏肉と卵の料理に『Mother and Child Reunion』という名前がついているのを見た。その曲は、サイモンがこう表現したとおり、「ジャマイカ国外の、非ジャマイカ系白人男性による、レゲエの初のヒット曲となった」

3枚のソロアルバムを作る間に、サイモンの野望は自身の書いている様々な歌以外に広がっていた。1977年に、ウディ・アレンが『アニー・ホール』に彼をキャスティングした。アニーがアルヴィー・シンガーを捨てるきっかけとなる音楽プロデューサー役である。「アレンの指示は簡単なものだった。「入ってきて、気の向くように喋って、彼女をパーティに誘うんだ。『very mellow』は必ず入れてくれ」最初の脚本では、全部ひどかった。僕はこう言った。「彼はこんなバカな男じゃないよ！」皆知っているとおり、ウディはロックンロール好きではない。でも彼は僕に何もかも選ばせてくれた。首にぶら下げたコカイン用のスプーンや、僕のパーティに来るはずのジャックやアンジェリカについてのことをね」

撮影現場で、サイモンは女優のシェリー・デュバルと出会い、ニューヨークで一緒に暮らすようになった。そのアパートメントの廊下の向かい側はローン・マイケルズのアパートメントがあり、彼はサイモンにとって、現状からこっそり抜け出して新しい計画を立てるようなときに打ち明ける友人だった。ある日、サイモンはデュバルについてそういう話をするために立ち寄った。マイケルズはこう言った。「二人は合わなかったんだ。彼はそれに気づいた」しかしサイモンはデュバルのことは大切に思っていたし、不親切にはなりたくなかった。マイケルズの助言はこうだった。「本当に単刀直入にいかなきゃいけない。『君に恋してはいない』とはっきり言わなければいけない。はっきり言わないと、彼女は聞き入れないよ」



翌日、マイケルズはデュバルと鉢合わせした。「あなたがポールに言ったのね」、と彼女は言った。マイケルは認め、何が起きたのか尋ねた。「そうね。彼はこう言ったの。『僕は君に恋していない。君を大事には思っている。君が住む部屋を探すのを手伝うつもりだ。でも一緒に住むのは終わりだ』」マイケルズは同情した。「シェリー、辛い状況だね。どんな気分？」デュバルは彼を見て、肩をすくめた。「彼は虫の居所が悪かったわ」

1980年、サイモンは映画『ワン・トリック・ポニー』の脚本を書き、サウンドトラックを作曲し、主演した。「楽しかったけれど、作品としての出来はそれほど良くなかった」次作アルバム『ハーツ・アンド・ボーンズ』に好意的な人はほとんどなかった。音楽に対する気持ちが萎えていたサイモンは、偶然南アフリカのタウンシップ・ジャイブのテープを聞き、とても気に入ったのでヨハネスブルクへ向かった。『早く家に帰りたい』を作曲したアメリカ人が一緒に録音したいから来て欲しいという電話を受けたとき、ベースプレイヤーのバキチ・クマロは自動車修理工場で働いていた。「彼が何を探しているのか全く知らなかった」と、それ以降ずっとポールのベーシストを務めている熊路は放した。「だけど彼はやってきて、音楽に惚れ込んだんだ。皆にとって良いことだった。私たちにとっても、アメリカ人にとっても新鮮だった。深みがあって。南アフリカ人としての自分にとっては、英語で演奏される曲を聞いて、彼が何もかもまとめあげていくのを見るのは、信じられないほど素晴らしかった」

サイモンはアフリカ音楽を略奪したとして、批判されたこともあった。しかし多くのミュージシャンにとって、サイモンの手法は彼が自身の芸術的な借りについて、目立って公に認めているという点のみが異なっているのだ。（「僕は何かを発明したことは一度もないよ」と彼は言った）ポール・マッカートニーはこう問いかける。「表現の問題なのか？ 良いアーティストは借り、素晴らしいアーティストは盗むとでも？ まあいいよ！我々は皆多大な影響を受けているんだ。『グレイスランド』を聞いたとき、僕は既にずっとアフリカのものが大好きだった。自分は『バンド・オン・ザ・ラン』製作でラゴスに行った。『影響されて』似たようなアイデアが浮かんだんだ。あらゆる芸術形態で、誰もがそうしている。受けた影響を刺激剤に使うんだ。ポールは、とても素晴らしく行った点が違っていた。『グレイスランド』は単にうまくやるだけじゃなくて、危険な領域まで踏み込んだんだ」

遡って1987年のニューヨークで、グリニッジヴィレッジのクラブ『サウンズ・オブ・ブラジル』で、サイモンはディジー・ガレスピーとプエルトリコ人ジャズミュージシャンのエディー・パルミエリと話す機会があった。彼らは共にサイモンにこう語った。「アフリカ音楽のアルバムを一枚作って、それで終わりとはいかないよ。続けていかないとね！」そして彼らは西アフリカのドラミングが、ブラジルを渡りキューバに行きついた歴史について即興の講義をした。年間を通じて、サイモンは長年のプロデューサー、フィル・ラモーンと共に何度かブラジルの都市を訪ねた。サルヴァドールで、都市の古い、貧しい区画にあるピロリー広場を歩いていると、ドラムの音が聞こえてきた。ラモーンはこう話す。「ポールが興味を持ったんだ。通りに20人がドラムを持っているのを目にした。ポールは古い8トラックの機材で録音させてもらうよう同意を取り付けた。私は校庭のマンホールの蓋越しにそれを録音したんだ」旅の終わりまでに、彼は自分が集めた音源にあまりにも興奮し、予定していたキューバまでの旅は取りやめた。その代わりに彼は『リズム・オブ・ザ・セインツ』を作ったのだ。

自宅近所で受けた影響もあった。1960年代の終わり頃、サイモンがセントラルパークを散歩していたとき、アシッドでトリップしていた若いプエルトリコ人が声をかけてきた。「あんたはポール・サイモンだろう！」その男性はカルロス・オーティズという名だった。「彼は興味をそそられる人間でね。自分も同じ状態だった。その日はプエルトリカン・ディ・パレードの日だったんだ。ある意味、パークを歩いている間に連携したんだよ」この二人は連絡を絶やさず、ある日オーティズはポールをサウス・ブロンクス界隈に連れ出した。

「あのブロックには入れない」と言い、サイモンに地元のギャングについて全てを説明した。

その日のことはサイモンの心に残った。『リズム・オブ・ザ・セインツ』製作後、丸5年を使って、劇作家デレク・ウォルコットと共に、ドウワップハーモニー、ゴスペル音楽、ラテンのリズムを、殺人を犯し、残りの人生を解放に向けて旅をすることに費やしたニューヨークのプエルトリコ人ギャングのストーリーに織り込むことに取り組んだ。『ザ・ケープマン』は今の舞台版『スパイダーマン』のようだった。ニューヨークの新聞は矢継ぎ早にミュージカルの制作上のトラブル、悪循環を描くコストについて報じた。開幕後、タイムズ紙は二度にわたって酷評を載せた。『悲しいほどの外れ』で『絶望的に混乱したただらだらとした作品』とこき下ろした。サイモンはこう話した。「大コケだった。個人的に感じて、傷ついたよ。本当にほくそえんでいるようだった。自分のことを嫌いな人がいっぱいいるのは驚くものだね。『自分はいいい奴だよ!』と思っている。けど皆はそれに同意していないって判明するんだ」

簡素化された『ケープマン』が昨年セントラル・パークのパブリック・シアターで再演された。オリジナルから削られた歌詞はウォルコットの手によるものだった。ウォルコットはこう話した。「我々は数年間素晴らしい共同作業をしたが、その後物事は悪化した。私にとっては辛いことだった。極めて苦痛なことも多かった。ポールは自分の行為を『芸術第一』の元に正当化するが、自分にとっては友情の方が芸術より大切だと思っている」 今回の公演はタイムズ紙から「物語りのニューヨークの伝統の本質的な部分」とするお世辞めいた劇評を受けた。

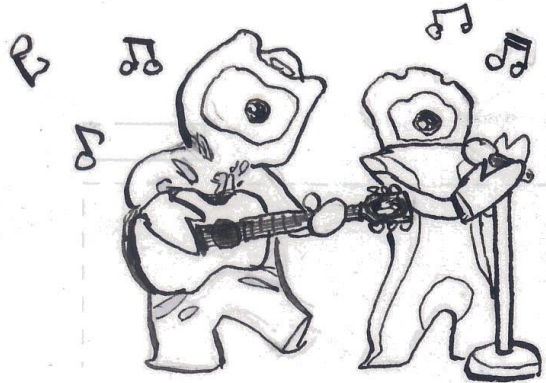
サイモンはよく、自分はもうヒット曲ではなく、アルバムを書いているのだと話す。製作途中、彼は他のミュージシャンをひよっこり訪ね、新曲を彼らに聞かせる。その中の一人、ニール・ダイヤモンドにとってその体験とは、『ひらめきを与えてくれる』と同時に『時々怖気づかせる』ものだったそうだ。「一度ならず、自分は別の職業に就くべきじゃないかと考えた」程度まで。

サイモンが自分の作品について話したくなかったときに会いに行くのがフィリップ・グラスだ。ジョン・レノンとジョン・F・ケネディに向けた哀歌『レイト・グレイト・ジョニー・エース』のストリング・コードをサイモンがグラスに依頼してから、30年に渡って親しい友人である。グラスはサイモンを『世代中最も重要なソングライター』と考えているが、サイモン自身はいつでもそう確かな気持ちではないことを承知している。親しくなった当初、グラスが作っている『シリアスな音楽』に対する嫉妬をサイモンが突然露わにしたことがあった。「僕は単なるソングライターだ。将来は誰も僕のことなんて覚えていないだろう」 グラスは啞然とした。サイモンに言った。「クレイジーだよ。君は最も重要なアメリカ人作曲家の一人じゃないか。君の音楽は古典となっているよ。音楽を聞く人がいる限り聞かれることだろうよ」 サイモンは驚いたようだった。「君はそう思う？」と聞いた。グラスは「そう思っているよ」と答えた。

キャリアの初期、サイモンは好きな作家の一人、詩人のフィリップ・ラーキンが、詩神に見捨てられたと絶望したと知った。「そのことは僕に強い影響を与えた」とサイモンは話す。「自分にもそれが起きるかもしれないと脅えたんだ」 それは起きなかった。喪失に心を奪われた成功したアーティストとして、サイモンは以前は若者だけの音楽とされてきたものを作って一生を過ごせるのだと証明したのである。ランディ・ニューマンはこう語る。「その分野で最良の作品を作るのは若い頃だということについては色々証拠があるけれど、ポールの最近の3枚のレコードは彼のこれまでの作品と変わらず良作だ。『So Beautiful or So What』の曲を聞いたが、いつもより気に入ったくらいだ。必ず何かが起こっているんだ。対位法が少し、ちょっとしたアクセント、幾ばくかのテンポの変化。聞いていて刺激的なんだよ」

次号へつづく





song book



ポール、アーティにとって  
イングランドは特別な地。

7/26 ノルウェーでツアー最終日のあと、  
ポールはロンドンで五輪見物でもするかと  
思いきや、7/29 ヤンキース戦観戦。  
さすがヤンキースファン!



この絵は  
ヨーロッパっぽい  
のですが  
どこでしょうね〜?

2012.8.5



アフガニスタン?  
イラク?  
なに?  
いや、NYか。

NYなまりを隠して  
イギリスなまりを  
使っている。

なんぼ好き  
ミュージシャン

……

本当は  
たきき  
なのに  
しっかり  
右きき用  
ギターを  
ひいている

みごとだ



BBC版

「シャロック」調ポールとアーティ

数学はきらいか?

何だって?

ぼくは考えごとが  
あると  
数学の問題を  
解きまくるし  
何日も口をきかない  
ことがある。



いや…問題とって  
いけば静かだろ…

それだけ?



おさななじみ  
なんだから  
わかって当然  
なんだ!





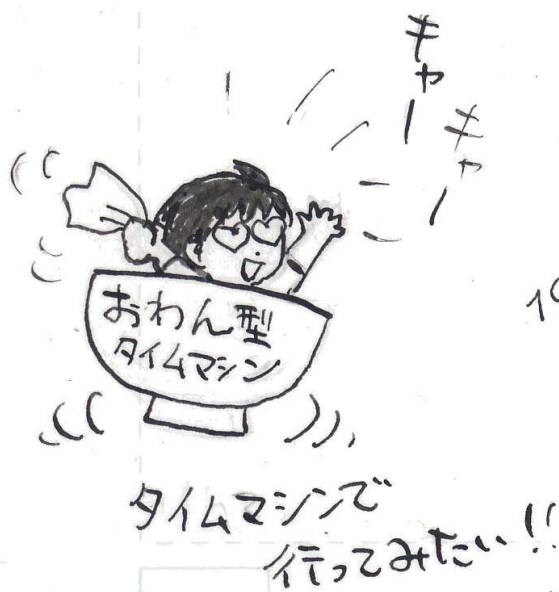
祝♡ロンドン五輪

← カンケーないですが...



ポールとパーティ  
落書き 詰め合わせ

By GACHA



1968.10.29  
Ohio University  
コンサートの写真が  
とても好きです







**Simon & Garfunkel Web Forum  
Off-Line Meeting 2012**

2012年8月11日(土) エールハウス  
<http://alehouse.hp.infoseek.co.jp/>